

同じ性能を維持する。



ホルベインの絵具づくりは、6工程の顔料テストではじまり、4工程の製品テストで終わります。絵具の主役である顔料が常に定まった色相をつくりだすか、そして油絵具になった後、そのすべてに発色、耐光性、固着力、安定性が保たれているかどうか。絵具は生き物。だから機械でつくられても常に同じ状態が生まれるわけではありません。同じ性能を維持するためには、細心の注意が必要なのです。ホルベイン絵具の命は品質です。

●油絵具20号(130ml)チューブ、40色新登場。大きいサイズでも、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-10-4 TEL.03(3982)8210 大阪府東淀川区上中島3-1-10 TEL.06(4721)1114



holbein

ホルベイン絵具
www.holbein-works.co.jp

holbein

三輪美津子

フォト・ペインティッド・ミステリー

鷹見明彦 文 大須賀信一 写真・印



1987年、コンセプチュアルな平面作品の試行をつづけながら、ドストエフスキーやブルーストの小説を読みふける日々だった



1985

「いつもギャラリーの空いている期間に展示させてもらいました。人に見せるよりも確認がしたかったのです」

N1ギャラリー(名古屋)でのインスタレーション 1985
撮影=成田弘

その作品に描かれた座り手の消えたソファのように、時折、美術館の企画展で眼にする作品に誘われながら作者のアリバイが浮かんでこないことで記憶に引つかりつづけてきたのが、三輪美津子という名前だった。こうした距離感、海外に在住する作家の場合に生じ易いのもかもしれないが、名古屋に生まれた三輪は、今日までのほとんどの歳月を同地で過ごしてきた。大学は、愛知芸大のデザイン科へ進んだが、とくにデザイン系の仕事に興味があったわけではなかった。学外ではじめた版画がきっかけで、多色刷りのカラー・エッチングを制作するようになった。

版画の制約を離れた作品を作りだしたのは、卒業から数年後の八〇年代の半ばころからだ。キャンバス地にアクリル・チップを溶かしてフィルム状の膜を作り、細密なドローイングを増殖させた画面を積層した初期作は、腐食の層を重ねる方法の延長上にあつた。それから



「瓶に瓶を描いて、瓶が瓶であることを消すこと、それがそれであること以外を使わずに、それがそれであることを消すこと」 1989

暦 1989 エナメル塗料、ガラス瓶12本 作家蔵

画面の手前に同じ模様を描いた椅子を置いたり、画面上にレインコートや帽子をコバインしたり、ドゥロイングした額縁を色面に付けたりした。絵具の原色をそのままブラッシュ・ストロークで塗った作品やラファエロ、モンドリアンなどの印刷された名画の色をサンプリングした連作もある。ファイルには、そうした初期の各シリーズが恵まれたスペースに整然と展示された、個展の様子が記録されている。経歴に記された個展のクレジットは、九三年からだったはずだが……!?

「ギャラリーたかぎ、ICANAGO OYAの前身の繊維工場跡を改装したN1ギャラリーのスペースやステゴザウルス……。休廊中や空いた期間に展示して撮影させてもらいました。発表したいという切実感がなかったのと、展覧会を前提に制作するのがダメだったせいもあります」。

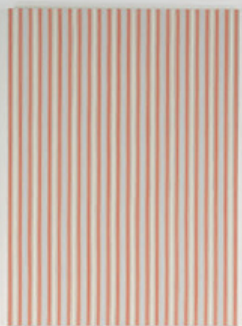
それを、「架空の個展」とするならば、十年近くも持続しえた事実の背後に現代美術についてギャラリー、「コレ



クターの層が地域に根ざして厚いといわれる名古屋の土地柄が感じられる。三輪の初期作には、その当時名古屋のギャラリーやICAGが率先して紹介したアルテ・ボーヴェラやネオ・コンセプチュアルな作品からの影響も見られるが、それを認めながら、「あのころは、外側の情報やアートよりも、ブルーストやドストエフスキー、ポーなどを耽読していた」。

At the top of the Mountain 1990
キャンバスに油彩 145.5×227.3cm

インテリア 2002
キャンバスに油彩
162×259cm、194×
145.5cm
資生堂アートハウス蔵



2002

「事はすでに起こっている。 床下の死体のように、
すべては隠されているけれど、そこにあるのはまちがいない」

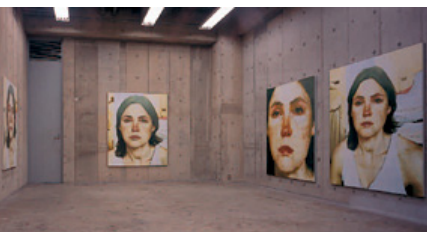
《暦》(一九八九)は、リキエールやバ
ーボンの空き瓶にエナメルで瓶の輪
郭を描いた作品。この作品は、油彩
とグワッシュでそれぞれ描いた同じ
図柄の絵に、その二つの絵を一枚の
紙に描いた絵を加えた作品や掌で
掴んだ足首だけを粘土で造った作
品とともに、八九年に東京国立近
代美術館で開催された「色彩とモノ
クローム」展に出品された。「架空の
個展」から美術館の展覧会に搬送
された新人の作品は、ライプヤカタ
リーナ・フリッチュ、ティム・ロリンズ
などの作品と並んで、コンセプトを
明確に視覚化する才気の芽えを見
せた。「一作ごとにあえて素材やス
タイルを変えて、手が馴れたりする
のを含めて、『自己規定』を避けるよ
うに意図していました」。

三輪の作品がより汎く知られる
ようになつたのは、日本とオースト
リアを巡回した、日本の現代美術
ゾーンズ・オブ・ラブ「展一九九二」
に出品した富士山など名高い高峰
の山頂を描いたフォト・ペインティン
グの連作以降だ。『さ』、『い』と『る』とや

みわ・みつこ 1958年名古屋生まれ。81年愛知県立芸術大学デザイン科卒業。95年VOCA賞受賞。95-97年フィリップ・モリス財団奨学金を受けケンストラー・ハウス・ベタニア(ベルリン)に滞在。98年スウェーデン国際アーティストプログラム・ゲストアーティストとしてストックホルムに滞在。コオジ オグラ ギャラリー、Gallery HAM ともに名古屋にて個展。グループ展では89年「現代美術への視点 色彩とモノクローム」(東京国立近代美術館、京都国立近代美術館) 95年「視ることのアレゴリー 1995: 絵画・彫刻の現在」(セゾン美術館)。96年「もうひとつの写真 写真的なるものをめぐって」(東京都写真美術館)。2001-03年権会展 資生堂ギャラリー など。現在、資生堂アートハウス 静岡県掛川市の「第5次花椿会作品展」に出品中(9月23日まで)。

右 旧い日本家屋の一室で紡ぎだされていくEBBAの貌。スピーカー・セットは、音を響かせるかわりに椅子やパレット台になって愛用されている *

下 《EBBA》 資生堂アートハウス蔵
昨年12月から今年1月にGallery HAM(名古屋)で開催された個展会場風景 写真=菊山義浩



つてみてわかったのは、自分には、内側にモチベーションがないということでした。山の作品は、蟻になつて登る感覚で白黒や色の柄として山の写真を写しとつてみようとする作業でした。

その後もテンプル・クロスの柄や花、猿、映画のシーンなどをモチーフとしたフォト・ペインティングを軸に、名古屋での個展と美術館の企画展への出品がついてきた。九六年のベルリン滞在にはじまるドイツ・オーストラリア、スウェーデンを移動しながらの制作と展示では、西部劇の悪役たちをモチーフとするインスタレーションや足で布上に砂と染料で描いた作品などが生まれた。

《インテリア》(二〇〇二)は、油彩で描かれたインテリア雑誌の写真によるシリーズの一作。ソファアとその上に飾られたミマル絵画がセプトになっている。ほかに安楽椅子や応接セットと映像や実物の鏡との組み合わせなどが設えられている。

「最近では、写しているというよりも描いてしまえという気持ちがつよくなって、どれだけ凝視できるか反時代的な作業を続けているんです。」
アトリエでは、スウェーデンで知り合った友人のポートレートによる連作の一点が描かれつつあった。描けば描くほど、イメージの像からズレていくようでは際限がなくなる……。作者自身が、描いたポートレイトの前で撮影されるのを観るうちに、ベンヤミンのことが浮かんできた。東京に戻ってから確かめると、つぎのように記された箇所が見つかった。

目覚めた意識にとらえては、類似性というカテゴリーはきわめて限定された意味しかもっていないがハンツシュの世界にあつては無限の重要性をもつ。というのモハンツシュの世界においてはすべては顔なのだ。そうした状況の下では、一つの文章すらも顔をもつていゝ個々の単語はいつまでもないが。W・ベンヤミン、バサージユ論(岩波書店)

たかみ・あきひこ「美術評論家」